

MINAMI KYUSYU NO JOKAKU

南九州の城郭

第8号 #
南九州城郭談話会報 #
平成10(1998)年6月20日発行 #
#####

熊本県人吉城跡の地下室

鶴 嶋 俊 彦

相良清兵衛は、本名を犬童清兵衛といい、人吉藩揺籃期の重臣である。永禄11年(1568)奉行・執政職の犬童頼安の子として生まれ、幼名を熊徳丸さらに軍七、のちに頼兄(よりもり)と名乗る。朝鮮出兵の際に相良姓を賜り「相良清兵衛」と改め、以後執政として第二十代長毎(ながつね)を補佐し、多くの功を立てた。とくに「関ヶ原の戦」では西軍側であったが、徳川に内通して相良家の存続を図り、家康お目見えの武士として藩内の実権を把握するに至った。彼は次第に主君を無視し、横暴で我が侘な行動となり、所領は藩の石高の三分の一を越す八千石あったという。

第二十一代の頼寛は父長毎の遺言にしたがい清兵衛の悪行を幕府に訴えた。寛永17年8月、判決によって清兵衛は津軽藩に預けられることになり、14年後の明暦元年に津軽において88歳で死去している。



人吉城跡の地下室

清兵衛の江戸召還中の寛永17年(1640)7月7日、人吉城内の清兵衛屋敷に一族がたてこもる騒動が勃発した。これを「お下の乱(おしものらん)」という。首謀者は留守を守っていた養子の犬童(田代)半兵衛(別名、犬童頼昌)で、清兵衛及び一族の断罪を予想して清兵衛の屋敷にたてこもり、城方との争いになった。半兵衛方は屋敷に火をかけ婦女子を殺害したうえで城方と切り合いを行い、半兵衛方は合計で121人が戦死した。

清兵衛屋敷が「お下の館」と呼ばれたのが乱名の由来であるが、中世的な支配体制を残した人吉藩が藩主を中心にした近世的封建制に移行する上で起こった必然的な事件(御家騒動)といえる。

平成9年、清兵衛屋敷跡の一角にあった文化センター本館が解体撤去され、その跡地を発掘調査した。調査面積は約600㎡で上位の遺構は削平され失われていたが、下位にあった清兵衛屋敷内建物の地下室とみられる石造の遺構を検出した。

この遺構は南北・東西の最大幅が6mの方形で深さ3m強、切石を垂直に積んで部屋を造る。部屋の内部は西北隅と西南隅が一部張り出した形で、西南と東北に階段用とみられる段が付く。底部の部分的な確認によれば、粘土層の上に玉石敷層があり、その上に焼瓦層が堆積し、さらに意図的に崩された石積み

上半部の石があり、これを一気に土砂で埋めている。焼瓦層と埋土内には17世紀前半代を下限とした中国産の染付・白磁・青磁を含む陶磁器片や瓦片が出土しており、「お下の乱」によって焼失した清兵衛の屋敷内建物の地下室と推定される。

乱後の絵図によれば、調査地点に該当する箇所に二階建ての持仏堂が記載されており、検出遺構はこの持仏堂の地下室である可能性が高い。古文書によれば持仏堂は首謀者一族の隠れ場所となっており、地下室が使われた可能性がある。

江戸時代の地下室は貴重品収納や緊急時の

貯蔵庫として使われたと考えられ、素掘りの例が多く報告されているが、当例のように江戸時代初期まで逆上る大規模な石造のものはなく、構造上において近似する天守の「穴蔵」との関係が注目される。乱後に作成された2葉の絵図は二階建ての持仏堂を絵図の主題として強調して描いている。この持仏堂の外に、城内には二階建て建物は本丸の護摩堂のみであることを考え合わせると、持仏堂は単なる宗教施設でなく、清兵衛の権力の大きさを象徴し、誇示する例えば櫓のような建造物ではなかったろうか。なお、底部の調査は、平成10年度に改めて行う計画である。

◆◆ 第8回見学会・例会、第3回総会報告 ◆◆

■ 見学会

2月15日の朝、前日の雨も上がり、何とか今年最初の見学会を実施することができた。参加者約70名は、知覧町教育委員会の上田耕会員の案内で、受付を済ませたミュージアム知覧を後に、知覧城跡の駐車場へ向かった。

入口には国指定史跡にふさわしい陶板の案内板が設けてあり、先頭が続いて城内へ入ると左手には広大な東之城、右手には本丸・今之城が見えてくる。見学者一行は発掘調査の行われた本丸へ上り、上田会員から切り土や盛り土による土塁などの詳しい説明を受けた。曲輪の中央では記念写真の撮影も行われた。

次に蔵之城へ移動し、周囲の眺望を楽しんだり、会員の多くは思い思いに曲輪や空堀を探索して壮大な規模を実感していたようだ。

知覧町教育委員会の日頃の手入れの良さのお陰か城内は大変歩きやすく、会員の皆さんも余裕を持って解説に耳を傾け、城跡の散策を堪能することができた。

■ 総会

見学会場からミュージアム知覧へ戻り、昼食を取った後、総会を館内の研修室にて午後

1時から開会した。

三木会長の挨拶のあと知覧町の東敏見町長からご挨拶をいただいた。議事の議長を永田典男会員へお願いして、会を進めた。

第1号議案は、平成9年の活動報告と決算報告であり、第2号議案の平成10年活動計画と予算説明とともに了承された。第3号議案は、懸案の機関誌発行の提案であり、趣旨や運営方法・仕様などの説明があり、会員の賛同を得ることができた。

第4号議案は、2年の任期を終えた役員改選であり、副会長の交替を除いてほとんどが留任と決まった。新副会長には、新東晃一会員、新幹事として吉元正典会員が就任した。

■ 例会

例会は、新東副会長の司会により、次のような発表があった。

上田耕氏「知覧城跡調査と城下の変遷」、橋口亘氏「加世田別府城の一郭（新城）と麓の範囲」、桒畑光博氏・下田代清海氏「都城市の中世城館2例」、鶴嶋俊彦氏「江戸初期、人吉城跡検出の地下室」他（下鶴 弘）

望晋(津)城の遺構と遺物 (後編)

— 島津氏在番の倭城 —

高 田 徹・黒 田 慶 一

4 遺 構

望晋城跡には現在、警備小屋、通信所が建つほか、遊戯施設が設けられ、本来の遺構は明確ではない。山頂のⅠは南北30m、東西約15mの広がりをもつが、平坦ではなく、端部に切岸等は見られない。Ⅱもなだらかに地形が下がり、その斜面下には近代の塹壕が走っている。Ⅲは現在山林となるが、他の部分に比して明確な平坦地が見られる。Ⅲは現在通信所敷地となり、その建設に際して掘削を受けているようである。付近に石積みも見られるが、城に伴うものではない。その東側鞍部は若干平坦になるが、斜面側にも堀切の痕跡は見られない。Ⅳは現在ヘリポートとなり、その東側に尾根が続くが、いずれも城郭遺構は認められなかった。Ⅴには現在、前述の朝鮮側の烽燧台が復元されている。Ⅴから北へ更に尾根を下った部分に小ピークがあって平坦地が見られるが、植林がなされており、城郭に伴うものではない可能性が高い。しかし、山頂部に瓦などの遺物が散布することから、発掘調査を行えば遺構は確認できるものと思われる。

5 遺 物

全て山頂のⅠで採集した。1・3が丸瓦、2が平瓦、4が磁器碗である。1は玉縁に近い部位の破片と思われ、凸面に青海波の叩き痕、凹面に布目痕を見せ、胎土は砂質でやや粗雑だが、焼成は良好で灰白色に焼き上がっている。2は凸面に魚鱗文様の叩き痕、凹面にやや粗い布目痕を有し、桶から分離以後、粘土円筒を分割した際の痕跡である側面の凸面側の破面が存在する。胎土はややダマを見

せるが精緻で、焼成は良好で、表面は灰色、断面は灰白色を呈する。3は玉縁部の破片で、玉縁との接合部は、凹面では緩やかなカーブをなしている。凸面は青海波の叩きを加えた後、回転ナデを施している。この回転ナデは玉縁部凸面にも見られ、水を含む皮か布様のものでなでたと見られる。凹面はやや粗い布目痕で、粘土円筒分割用のへう切りは玉縁部にはほとんど入っておらず、玉縁部側面は全体に破面をなす。胎土は精緻で、焼成良好な須恵質で、灰色を呈する。4は釉の色合いが、2.5GY8/1の灰白色の青白磁碗で、復元口径

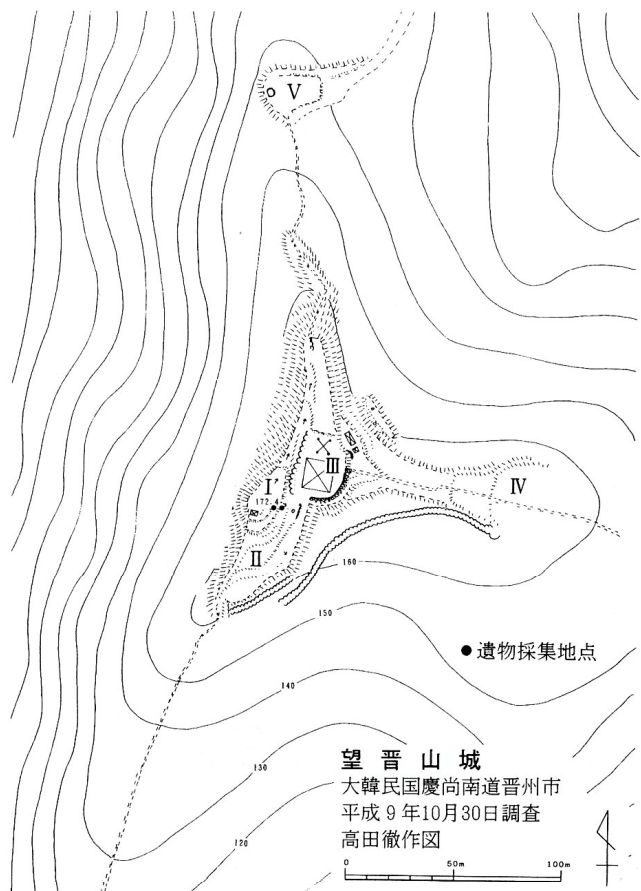


図3 望晋山縄張図

は12.2cm, 器高は高いが, 器壁が全体に5mmと厚いことから, ボッテリした感を与える。口縁端部は丸く収められている。

以上, 4点の遺物について見てきたが, 筆者には4の青白磁碗の時期を特定する能力に欠けている。瓦に関しては, 他の倭城跡で採集されるものと同じ要素, 即ち, 凸面の叩き痕・凹面の布目痕の未調整(ナデ消しの欠落), 粘土円筒分割時の破面(未調整), 須恵質の焼成(イブシを意図したものは見られない)等々は持っている。しかし, 日本とは違って, 朝鮮では丸・平瓦の造瓦は, 古代～近代にかけてほとんど変化を見せていないことを鑑みると, これらを倭城のものとするに逡巡する。要は表採遺物からの議論故の弱点であり, 将来, 遺跡発掘によって, 遺構に伴う遺物が検出できた時にはじめて, 遺物の時期問題も氷解するものと思う。

6 結びにかえて

以上, 望晋城(正確には望晋山所在遺跡)の遺構と遺物を中心に述べてきた。記述しながら『征韓録』の望晋城の遺構は, 絶対この望晋山のどこかに眠っているという意を強くした。

不幸な朝鮮の役は, 被害国の朝鮮は勿論, 加害国の日本にも, 参戦国の明にも深く暗い影を落とした。明は滅亡して清に取って代わられ, 豊臣政権も時を経ず滅亡した。

我々は平和な21世紀を迎える上にも, この3国が会戦した晋州の地, 特に晋州を一望の下にできる望晋山の地を, 顕彰していかなければならないと思う。

参考文献

城郭談話会『倭城の研究』創刊号 1997年
高田 徹 「倭城」『秀吉の城と戦略』

成美堂 近刊

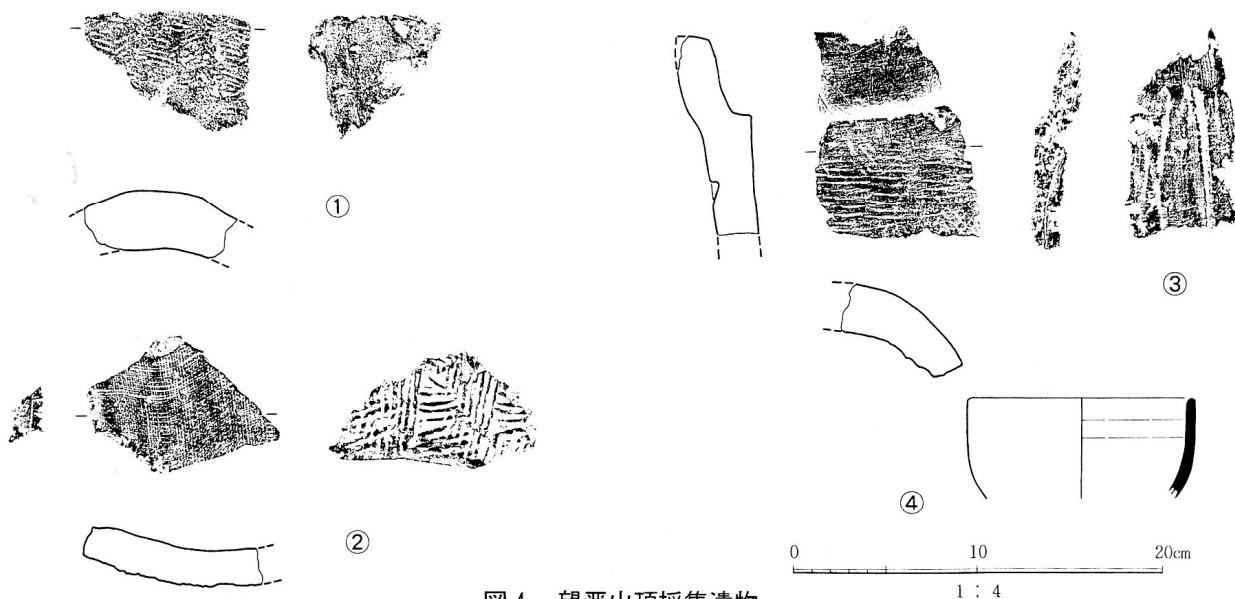


図4 望晋山頂採集遺物

募 集 !

◎機関誌『南九州の城郭研究』創刊号の原稿募集

1. 論 文 400字×50枚程度(図版・註を含む)
2. 研究ノート 400字×20枚程度(図版・註を含む)
3. 史料紹介 400字×5～20枚, 短くても可

お 知 ら せ

『都城市の中世城館』が刊行されました。

詳細は, 宮崎県都城市教育委員会へ

TEL 0986-23-9547

佐土原城出土の瓦をめぐって(2)

若山 浩章

佐土原城跡出土の瓦について前回は主にいわゆる抑止力説への疑問を述べた。今回は金箔瓦をもつ遺構がいつ誕生したかという最も基本的な問題について検討したい。

これについては五味克夫氏が本会報3号において、『日向国史』に慶長16(1611)年に天守台が造営されたという記事があることに注目され、その記載が無視できないことを述べておられる。但し、五味氏も指摘されているように『日向国史』は、その根拠を示していないという難点があった。

しかし、これは①『鶴城譜略 三』と②『佐土原藩譜 卷之五』に拠っていると考えてまちがいないだろう。この2書は、明治以後、佐土原藩の通史編纂事業の動きの中で誕生したものである。佐土原城については①には「(慶長)十六年辛亥……此冬佐土原城ノ内部ヲ修補ス、天守ヲ立テ櫓・堀・門ヲ設ク、樺山久成奉行タリ、工翌年ヲ歴テ成ル、」とあり、②には「(慶長)十六年辛亥……(島津)忠興公、樺山清右衛門久成に命して佐土原城を経営せしむ、天守・櫓を建……明年(慶長十七年)壬子に至て成り」とある。いずれも、慶長16年というはっきりした年代を掲げ、樺山久成が工事に関わったことが記載されている。では、両書の本になった史料は何か。これについては明らかにできないが、①の注記の中に「誰斎の覚記に曰、」とあることから、何らかの旧記が存在し、それを根拠にしたらしい。したがって、この記載は根も葉もないことではないのであり、この時期を再検討する必要がある。

そもそも天守台の初見は、管見の限り「旧事集書」(『日向郷土史料集』1)の「天守台の跡、山の北にあり、式重天守ニて石垣の跡あり、此左右堀五百間余ありたる由、唯今石

の多く積重ある所ハ榑藤大学石垣を築くこと上手ニて谷山五右衛門杯稽古為し、処々に有し石を起し取て石を疊、稽古せし跡なり、夫より内に天守ハ有りたるよし、此切石ハ細嶋石のよし」という記載である。「旧事集書」は藩の旧事を集め編集するため藩主島津忠持が藩士富田掌江に命じたもので、成立は文化13(1816)年～天保2(1831)年といわれている。この記載には、天守台以外に石垣作りの榑藤大学の逸話が収録され興味深い。これは大学の若い頃の修行中の話と考えられる。同書によれば、大学は榑藤種盛の子で、慶長5(1600)年の宮崎落城の際は、抱子であったという。仮に慶長16年に城が建設されたとなると、大学は当時15歳前後とということになり、修行中の頃の年齢と考えておかしくない。とすれば、この記載は慶長の築城からそう遠くない話と考えられ、前2書の記載の傍証となりうるのではないだろうか。この話からすると、大学の師は谷山五右衛門ということになるが、天守台の石垣作りには、五右衛門が関与していた可能性がある。

慶長の築城については、考古学の側からも結論が出つつある。木村明史氏は、同城の発掘調査から慶長期末の割石技術による石垣の存在を発見され(「佐土原城の石垣について—城郭における天守の役割—」『織豊城郭』4, 1997)、慶長末期に築城がなされたことを主張されている。以上の点を考慮すれば、この遺構は、慶長期のものと考えてよいと思われる。問題は木村氏が主張するように、天正年中に金箔瓦を持つ天守台が存在したかどうかであろう。存在したとすれば、考古学は遺構や遺物に対し、慶長のものと天正のものとを明確に選り分ける作業をしなくてはならないだろう。その意味で、むしろ問題はやこしくなったと言えるかも知れない。

さて、天正年間に天守が存在したとする根拠の一つとして、飢肥城歴史資料館架蔵の

「天正年中佐土原城図」がある。(絵図は前掲木村論文参照)。

この絵図の特徴は、城全体の曲輪と各入口の櫓門、三重の屋根をもつ天守らしき建物が描かれているが、本丸の建物など一切描かれていないことである。したがって三重の屋根をもつ建物は絵図全体の中で際だった存在に見える。そしてこの建物の位置と今回金箔瓦が出土した遺構がほぼ一致しており、にわかにこの絵図の評価が高まった。

しかし、この絵図には、「天正年中佐土原城図」と記されているだけで詳しい来歴はよくわかっていない。伊東家の事務所の落款があることから伊東家に伝来したということは分かるが、筆などからして天正年中にできたとは思えず、後世の作か写しと考えた方がよいと思われる。現段階では評価し難く、充分検討を要すべき絵図と考える。

ただ興味深いのは『日向地誌』によれば、平部嶠南がこの絵図を見ていたことである。嶠南は佐土原城に関心があったらしく、細かにその歴史を調べ、『日向地誌』に書きつづった。注目すべきは伊東義祐以後の記載である。嶠南は次のように解説する。

義祐は天文5(1536)年家督を相続するが、都於郡城が兵火にあったため、佐土原城に入った。ところが天文6(1537)年12月12日、佐土原城も火災に遭い、城中・宅舎が悉く焼けたため義祐は宮崎城に移住。佐土原城に戻ったのは天文12(1543)年と推定している(これらの記載は『日向記』をもとにしたのだろう)。

そして義祐が豪奢な性格で武威を近国に振るったため、佐土原城下ではおよそ「凡一材一芸の士ヨリ農工商ノ徒ニ至ルマデ四方ヨリ輻輳シ、郭外市塵モ屋宇櫛比シ、鶏鳴狗吠相聞エ四境ニ達スル景況ナリ……、当時都於郡ヨリ佐土原ニ連ナリ繁華ノ一城下ナルベシ」というような盛況ぶりであったと「古伝記」(原本未詳)等をもとに説明している。

どうやら嶠南は、この絵図を伊東氏時代のものを見ていたふしがある。確かに天守には、それにふさわしい城下町が存在して然るべきである。

実は今回の一連の議論の中で、城下町の存在はほとんど話題にされてこなかった。嶠南の考えに立てば、天文6年以後の建設によって、城内は一新し贅をこらしたものとなり、同時に城下町の建設が急速に進められたということになる。確かに本城が都於郡でありながら義祐が佐土原城に残ったこと、また島津家久が都於郡ではなく佐土原を拠点としたことなどを考えると、その可能性はある。嶠南の考えは、その意味で重要な点をついている。

では、天守台といわれるものは、この時に建設されたのであろうか。それは否である。というのも、もしそうだとしたら絵図中の本丸の位置に建てたであろうからである。この遺構はいかにも後から付け足したという感じがしてならない。絵図も門や壁など後に改修をしたような部分を強調した描き方である。

であれば、それは絵図が語るように天正年中のことだったのだろうか。天正5(1577)年に豊後敗走をする以前に伊東氏が建設したのだろうか。あるいは島津家久が入部して後のことであろうか。いずれをとっても筆者には懐疑的である。というのも、それでは何故、天守台を慶長16年に立て替えたかという疑問が生じるからである。仮に天守台があったとしても、立て替える位なら余り大したものではなかったのではないだろうか。今後考古学の成果によって、天正の遺構の痕跡が認められれば、この議論にも明るい材料が得られるように思われるが、現段階ではそれも充分とは思えない。それを踏まえた上で、もう一度この絵図を評価しても遅くはないと考える。

本稿執筆にあたり、史料について岩切悦子氏に種々御教示をいただいた。記して謝意を申し上げたい。

宮崎県えびの市徳満城縄張図

市田寛幸・市田政瑠

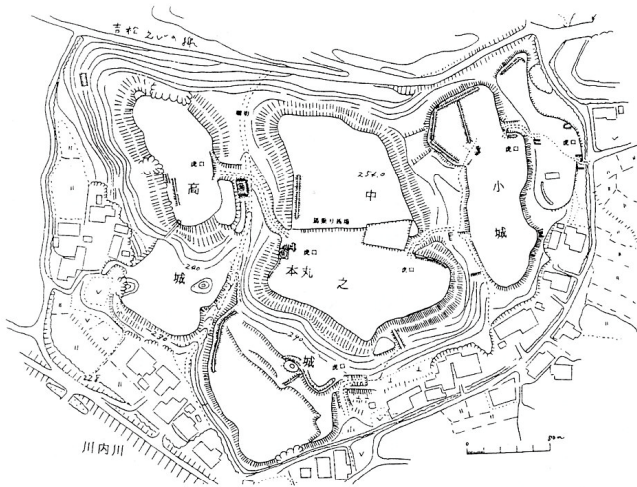
徳満城の歴史 宮崎県えびの市大字川北字本丸に所在する徳満城は、応永年間(1394～1428)、北原氏の居城で、加久藤郷の中心的な場所であったが、永禄7(1564)年北原氏に代わった島津氏(義弘)が、加久藤城に入ってから、加久藤城に中心が移り、加久藤城の支城となった。

加久藤城下にあった「不動寺」も、島津氏入城後、徳満城から移されたものと云う。

徳満城の位置 えびの市の中央、国道221号線より国道268号線が分岐する地点の約100m先より吉松～えびの線に入り、しばらく行くと九州縦貫高速道路の下をくぐるが、更に進むと、左手田圃の中に、こんもりと杉木立の茂った、比高30m程の小岡が見える。これが「徳満城跡」で、道端に「徳満城跡」の石碑が建っている。

この城の総構えは、南の川内川を外堀とし、東の関川、更に関川より取り入れた北より西側を巡って川内川に注ぐ水路を内堀とし、城は、一つの堀切と、一筋のゆるやかな谷によって、三つの区画に仕切られている。

城郭は、西から「高城」「中之城」「小城」



徳満城縄張図

と呼ばれ、本丸跡、馬乗馬場、及び井戸跡と呼ばれる場所二ヶ所が残っている。しかし、加久藤城・飯野城に比べて比高の低い城で、防御面で弱いために、加久藤城・飯野城の方へ本拠を移されたのものであろう

徳満城の遺構 吉松～えびの線の道路より堀切に入ると、約70mの所で、右の高城へ入る道とその反対側、中之城へ入る道の接点に交差する。高城へ入る道の角には、約4×2mの矩形で深さ約1mの凹地があり、周囲の壁面は玉石が積まれ、これは井戸跡と呼ばれているが、湧き水を溜めていたのではないかと思われる。この井戸の段と、その上に小さな郭がある。道を20mほど登ると、正面が「切岸」となっていて、道は、右へ直角に曲がって主郭へ登る。ここが「高城」の虎口である。左へも道が登っているが、こちらは後年造られたものと云う。

高城は、周囲が懸崖で防護しやすいせいか、土塁はあまり多くなく、虎口の反対側・西側に食い違いの土塁があり、ここより下へ道があったのではないかと思われるのだが、付近が崩落していて、その痕跡を確認できない。また、北西隅に見張台(櫓台)があり、その下方のやや緩傾斜の部分に横堀が一部分残り、掘り上げた土が土塁にされている。高城の南の郭に、人工的と思われる二つの小丘があるが、他の城跡にもこれと同様のものがあるところもあり、何を意味するものか不明である。

本丸を含む中之城は、おおよそ三つの郭に分けられるが、周囲はすべて高い懸崖に守られあまり土塁がない。ただ、高城との間の堀切に面した部分には土塁が築かれ、「虎口」にあたる部分には、更にT字型の土塁があって、その内側には「深井戸」の跡がある。虎口より東方へ「馬乗り馬場」と呼ばれる場所があり、上下の郭の差が1m位あってここで乗馬していたものであろう

う。南部の郭には、墓地の横より入る道があり、虎口が構成されている。中之城と小城を隔てる谷は、緩やかな勾配のため、四ヶ所に切岸が造られ、敵の侵入を難しくしている。また、ここより中之城・小城へ取り付く部分には、「虎口」の守りがなされている。一番小さな「小城」は、高さが低いせいか、面積の割には長い土塁が築かれ、特に北側の道路上と谷間の「切岸」の上には、しっかりした土塁が残っている。小城は、東方から入る虎口がしっかりしたものである。

徳満城には石垣が築かれていたが、正徳三(1713)年川内川を堰き止めて、馬関田・吉田・吉松三郷の約330ヘクタールの田圃を潤す「堂本井堰」を造るとき、城の石垣を崩して堰石にしたと云われ、現在は、石垣はまったく見られない。

応永二(1395)年、北原周防守範兼は、この城中で人吉城主相良祐頼と酒宴の最中、意見の衝突から相刺死したとも云われ、また永享二(1430)年には、島津氏の総州家と奥州家とが争い、総州家島津氏の左衛門尉久林の徳満城隠棲が発覚して、奥州家島津氏の島津忠国に攻められ、11月10日ついに久林は城中で自殺して果てた。時に久林は18歳であったという。

お知らせ

- ◆第10回の見学会・例会は9月中旬、熊本県で開催の予定。
- ◆第7回例会資料集「加藤清正と近世南九州の城」(65頁)、会報「南九州の城郭」第1～5号(合冊)を扱っています。いずれも1,000円です。事務局まで。
- ◆川元茂信会員が南九州市城郭談話会のホームページを開設!アクセスをしてみてください。
URL <http://www.satsuma.ne.jp/myhome/kawamoto/>

【新入会員】

(6月10日現在)

赤星 雄一	池田 伸二	稲丸 雅文
稲盛 勝次	打越 和郎	上床 真
岡松 荘一郎	斧 淵 國彦	小山 文好
城光寺 正子	鈴木 義昭	諏訪園 保
田村 省三	降矢 哲男	松井 重雄
松本 浩二	柳 泰輔	

第9回見学会・例会案内

日 時	平成10年6月28日(日) 9:30～15:00
集合場所	高千穂町コミュニティセンター (宮崎県高千穂町)
交通案内	TR高千穂鉄道高千穂駅 徒歩7分
会 順	(1) 見学会 9:30 集 合 9:40 町内の城跡見学 12:00 昼 食 (コミュニティセンター) ※ 希望者は弁当を受けます。 (2) 例 会 13:00 研究発表・質疑応答 ・高千穂町の城郭と歴史 ・各地の城館調査報告 15:00 解散

編集後記

- ◆前回に引き続き、高田徹・黒田慶一両氏の倭城についての報告と若山浩章氏からの佐土原城の瓦についての論考を掲載いたしました。感謝申し上げます。佐土原城の瓦については、何度かの論争を通じて、問題点が明らかになってきました。木村明史氏からの反論が期待されるところです。
- ◆機関誌『南九州市城郭研究』創刊号の原稿がそろそろ追い込みです。会員の方々、宜しくお願いします。
- ◆次号の会報発行は、9月上旬の予定です。
(Shige)

南九州の城郭 第8号

発行所 鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
ミュージアム知覧内 上田耕 気付
南九州市城郭談話会
(振替口座 02040-6-37850)
発行者 三 木 靖
印刷所 (株)ト ラ イ 社
入会金500円 年会費1,000円